

様々な角度に変化した自己顔の認識

Recognition of one's own face viewed from a variety of viewpoints

仲渡江美¹⁾

Emi Nakato¹⁾

E-mail : enakato@komazawa-u.ac.jp

和文要旨

近年、見慣れた顔の一つである自己の顔に関する研究が行われている (Tong & Nakayama, 1999; Keenan et al., 2001)。これらの研究では、自己顔は既知顔や未知顔と比べ、より早く正確に認識されることや、自己顔を提示すると右半球での活動がより高くなることが示されている。日常、我々が鏡で自分の顔を見る場合、正面顔だけでなく、斜め顔や横顔まで向きを変えて見ることが多い。そこで、本研究では、横顔や後頭部など様々な頭部の向きが変化した際の自己顔の認識について、未知 (他者)、既知 (他者)、自己 (自己) といった視覚カテゴリー識別課題を用いて検討した。その結果、まず自己顔は、既知顔や未知顔よりも、識別にかかる反応時間が最も早かった。これまでの自己顔での研究と同様、自己に関する処理過程が、他者と比べ特別であることが示唆される。次に、頭部の向きの変化における分析の結果、自己顔や未知顔では正面顔から横顔での反応時間が早く、後頭部になるにつれ判断時間が長くなった。一方で、既知顔ではいずれの向きにおいても反応時間が一定であった。つまり、未知 (他者)、既知 (他者)、自己 (自己) といった顔のカテゴリーの違いによって、各向きの認識も異なった。したがって、既知や自己など特定の顔に対する見慣れた度合いが増せば、いずれの向きでも早く認識可能になるのではなく、むしろ日常の視覚的経験によって、異なる向きから見た顔の認識が影響されていると推測される。

キーワード：自己顔、顔の様々な向き、視覚カテゴリー識別課題

Keywords : one's own face, different views of faces, visual-categorical face discrimination task

1. はじめに

我々は、有名人や友人などのすでに馴染みのある既知人物の顔と、全く見知らぬ人や一度会っただけの人など馴染みのない未知人物の顔など、様々な顔を見て生活をしている。このような、顔の既知性に関する心理学的な研究では、既知顔と未知顔の処理過程がそれぞれ異なることが報告されている [1],[2]。

これらの研究では、顔に含まれる視覚情報を、目、鼻、口などの内部特徴情報と、輪郭といった外部特徴情報に分け、いずれの情報も未知顔と既知顔の同定に有効であるかについて検討している [1],[2]。その結果、未知顔では外部特徴情報、一方で既知顔では内部特徴情報を手がかりとして認識することが示された。すなわち、未知人物では、

特徴を瞬時に把握しやすい髪型などを手がかりとするが、その人物と接する機会が増加すると、髪型といった変化しやすい特徴ではなく、個人の顔に特異的な顔の内部の特徴に重点をおいて認識するようになる。したがって、我々は、顔の既知性の差によって、未知、既知それぞれの顔に適した視覚情報の処理を行っていると考えられる。

従来の研究は、主に既知顔と未知顔の比較について検討されていたが、近年、見慣れた顔の一つである自己の顔に関する研究が行われている。

自己の顔の認識に関するニューロイメージング研究では、ヒトの脳内の右半球で、他者の顔と比べ、自己の顔に対して活動が増加することが示されている。Keenan ら [3] や Kircher ら [4] は、fMRI (functional magnetic resonance imaging)

¹⁾ 駒澤大学文学部心理学科、Department of Psychology, Komazawa University